



現代語訳 特命全権大使

米欧回覧実記 全5巻

久米邦武 ● 編著

水澤周 ● 訳注

米欧亜回覧の会 ● 企画

近代国家日本の指針を求め、
1年9か月にわたり世界を旅した明治維新期のリーダー達は「世界」に何を見たのか。

19世紀の世界情勢を詳細に伝えるエンサイクロペディアを、「米欧亜回覧の会」分科会「実記を読む会」での、
足掛け8年間にわたる多面的かつ深い読み込みの中から明らかにされてきた様々な成果や、

近年刊行された英語版の解釈を反映させ現代語化。

漢文訓読体の原文が持つ力強い美しさを生かした流麗な現代語と、

最新の研究成果を取り込んだ延べ800に及ぶ詳細な注により、現代の読者にも解りやすく読みやすい形で甦る。

政治、経済、産業、技術、軍事、教育、文化、社会、風俗など、幅広いジャンルからの多角的な読みにこたえる、

明治初期における西洋文明見聞録の一級資料。

各巻の主な内容

第1巻 アメリカ 編

日本近代史における「岩倉使節団」の位置付けや、その長大な記録『米欧回覧実記』の内容分析、そして、それが持つ意義などについては、これまでに数多くの研究や解説が、内外多数の研究者によって行われている。しかし、私はそれが十分に行われたとは思っていない。そのように考える大きな理由のひとつは、『米欧回覧実記』というテキストが、「文庫」というポピュラーな形で出版されているにもかかわらず、まだまだ限られた人にしか読まれていないこと、特に若い読者にとっては、これがなかなか取り付きにくいテキストであることにあると思う。せっかく手に取って見ても、途中で放棄することも多いのではないかとさえ危惧されるのである。……………(中略)……………
もちろん、いやしくもこれを研究しようとするものにとつては、これを原文で読むことは必須である。しかし、さらに広くこのテキストが読まれるような手段が講じられれば、研究の裾野はさらに大きく広がるはずであり、より多彩で多角的な研究が生まれる豊かな土壌が用意されるであろう。また、専門的研究という問題を越えて、このテキストが持つ意味もたいへん大きい。すなわち、一九世紀後半の欧米諸地域の貴重な情報としても、東西比較文明の材料としても、風俗史や社会史の史料としても、このテキストの内容はたいへん豊かなのである。すぐれた文明史、社会史的読み物としても、ひろく一般の読者にもつとんど迎えられてよい。さらに言えば、日本の近・現代の持つ問題、そのありかたをきちんと考察し直し、未来を見通そうとする作業においても、この『実記』を読んできちんと分析することはまことに有効なものではないか。そう思った思いが、この現代語化の作業のきっかけとなった。 水澤周(はしがき)より

本巻には明治四年(一八七二)の横浜出港から、約七か月間にわたるアメリカ各地訪問、そして大西洋横断までの記録を収録する。最初の訪問地サンフランシスコでの熱烈な歓迎には、大抵大陸横断鉄道での移動中は雪山、砂漠と目まぐるしく移り変わる広大な自然と開拓精神に心うたれ、首都ワシントンでは条約改正問題に苦しみつつも、南北戦争後のいわゆる金ピカ時代のさまざまな文物をどん欲に吸収する。
行程 横浜↓サンフランシスコ↓サラメント↓ソルトレークシティ↓シカゴ↓ワシントン↓ナイアガラ↓サラトガ↓フィラデルフィア↓ニューヨーク↓ボストン



第2巻 イギリス 編

産業革命の最盛期におけるイギリスを巡る二二日間の旅。経済(シティ)、政治(ウエストミンスター)の中心都市ロンドンで交易・商業の重要性を痛感し、造船所・蒸気車工場・炭坑・製鉄所・紡績工場など、五十か所近くにおよぶ各地の製造工場に世界に誇る英国の富強の源を見だし、スコットランドの風光に心やすらぎ、しばしの憩いを得る。「遅れてきた青年」日本の切ない思いも吐露される。
行程 ロンドン↓ポーツマス↓リヴァプール↓マンチェスター↓グラスゴー↓エディンバラ↓ニューキャッスル↓シェフィールド↓バーミンガム↓チェスター…等



第3巻 ヨーロッパ大陸 編 上

いよいよヨーロッパ大陸の中核へ。「天宮」のごとく壮麗かつ優美なパリで、欧州文化の最先端の地であり続けるフランスの輝きに圧倒され、大国に囲まれた小国ながら個性を生かした国づくりで独立を保つベルギー、オランダにも日本が学ぶべき姿を見る。普仏戦争に勝利し、新興の気概あふれるベルリンの街では、日本に共通する国の気風を感じ、新しい日本が進むべき道の最適の手本を見いだす。
行程 パリ(市内、ヴェルサイユ、サンジェルマン、フォンテーヌブロー…等)↓ブリュッセル↓カン↓リエージュ↓ハーグ↓ロッテルダム↓ライデン↓阿姆斯特ダム↓エッセン↓ベルリン



第4巻 ヨーロッパ大陸 編 中

欧州一の大国ロシア。日本にも大いなる脅威であった強国の実態は、政教一致の絶対君主制支配のもと、皇帝を中心とする一部貴族たちの搾取により、大多数の国民が貧困にあえぐ、「未開の大国」であった。そして一行は、バルト海沿岸の二つの小国デンマーク、スエーデンを経てイタリアへ。西洋文明の源流の地ローマで、文明の栄枯盛衰に思いを馳せ、また「西洋」の多様性を知る。
行程 サントペテルブルグ↓ハンブルグ↓コペンハーゲン↓ストックホルム↓フランクフルト↓ミュンヘン↓フレインツェ↓ローマ↓ナポリ↓ヴェネツィア↓ウィーン



第5巻 ヨーロッパ大陸 編 下

一行の旅もいよいよ終盤へ。衰えを見せつつある老大国オーストリアの都ウィーンで、国の威信をかけ開催されていた万国博覧会を見学しつつ、各国を実地に回覧して得た知識を総括する。国際的景勝地スイスではその美しい景観を堪能し、大国に囲まれた小国でありながら独立を維持するその国民性を高く評価する。そして帰国の途上、いまだ大国の植民地として支配されるアジア各地を見聞し、弱肉強食の世界でこれからの日本のあるべき姿を想う。
行程 ウィーン↓チューリッヒ↓ベルン↓ルツェルン↓ジュネーヴ↓リヨン↓マルセイユ↓スエズ↓アデン↓ゴール↓シンガポール↓サイゴン↓香港↓上海↓横浜



●岩倉使節団回覧に随行した画家たちの描いた、エッチングによる綿密な風景画を、全編にわたり310点以上掲載。



「米欧亜回覧の会」について
「岩倉使節団」ならびにその旅の記録である『米欧回覧実記』に関心を抱く人々のサロンとして、「岩倉使節団」の研究者でノンフィクション作家である泉三郎氏を中心に約80名の同好の士によって1996年4月に設立。「岩倉使節団」および『実記』の研究とその啓発を試み、年4回の例会のほか、「実記を読む会」を中心に「歴史部会」「現未来部会」と各分科会に展開して、『実記』そのものについてや岩倉使節団に始まる「日本近代史の研究」や日本の抱える「現代の諸問題、未来の問題」について互いに学び、意見交換を行うなど、活発に活動を続けている。現在会員は200余名。ビジネススマン、官僚、学者、ジャーナリスト、医師、弁護士、主婦など多彩なキャリアをもつ好奇心の盛んな人たちの集まりである。設立満5周年を迎えた2001年には、その記念事業として「岩倉使節団」についての日本で初の国際シンポジウムを開催。内外の学者、研究者を招いて3日間にわたり行われ、その成果は『岩倉使節団の再発見—その今日的意義』(思文閣出版、2003)として刊行された。また、2004年9月には特定非営利活動法人(NPO法人)としての認可を受け、あらたにNPO法人として発足した。

訳注者略歴
水澤周(みずさわ しゅう)
1930年東京生まれ。1954年早稲田大学文学部卒。NHK、国際文化振興会、日本読書新聞等を経てフリー編集者兼ライター。主な著作に、「八千代の三年—昭和十九年秋—二十二年秋へ」(風媒社、2002)、『青木周蔵—日本をプロシヤにした男』上・中・下(中公文庫、1997)、『連句で遊ぼう』(新曜社、1995)などがある。発足当時より「米欧亜回覧の会」に参加し、「実記を読む会」のチャーター役として現代語への訳注を牽引。原テキストが久米邦武個人の労作であることの意義を尊重し、今回、単独で現代語化作業を行った。

●デンマークを訪れた際、晩餐会の模様を報じた当時の新聞。